



定本版

# 山本有三全集

第三卷

新潮社版

編纂

土屋文明

高橋健二

\*

題字

土屋文明

詞人哀女  
倭百米

.....  
© Hana Yamamoto.  
1976. Printed  
in Japan.

乱丁・落丁本は、ご  
面倒ですが小社通信  
係宛ご送付下さい。  
送料小社負担にてお  
取替えいたします。

山本有三全集第三卷

定価三〇〇〇円

昭和五十一年十二月二十日 印刷  
昭和五十一年十二月二十五日 発行

著者 山本有三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七  
業務部・(〇三)二六六一五一一  
編集部・(〇三)二六六一五四一一  
振替東京四一八〇八番

印刷所 二光印刷株式会社  
製本所 神田加藤製本

山本有三全集第3卷 目次

霧の中 ラジオ・ドラマ

盲目の弟 四場

女人哀詞 四幕

「女人哀詞」の中の外国語訳解

米百俵 二場

注

\*

隠れたる先覚者 小林虎三郎

そえがき

編集後記

五

三

七

二〇六

三三

二六四

二七三

二六九

高橋健二 三一

山本有三全集第3卷



# 霧 の 中

ラジオ・ドラマ

執筆

発表

放送

昭和二年七月二十二日

東京中央放送局の依頼によって

昭和二年十一月「キング」

昭和三年五月初放送 JOAK

放送指揮・久米正雄

航海中のある貨物船

はじめはそのブリッジ（船橋）の上。

汽笛が断続的にポーッ、ポーッと鳴る。

下のボイラー・ルームからエンジンの動いている音がややゆるく響いてくる。

三等運転士　　いったい、いつになったら晴れるんでしょう。どうもじつにひどい霧ですね。

船長　　今夜はわけて深いな。

三等運転士　　え。わたしはカムチャツカ航路ははじめてですが、話に聞いたよりもずっとひどいですね。出帆以来、霧のない日って一日もないじゃありませんか。

船長　　うム、夏場はいつもいけないんだ。

三等運転士　　このぐあいではベトロパウロフスクにはいるのは、だいぶおくれますな。

船長　　しかたがない。これじゃ速力を出すわけにはいかんからな。

ボイラー・ルームでシャリンシャリン石炭をしゃくう音と、火夫がそれをくべながらうたっている歌が、ヴェンチレーター（通風筒）を通してかすかに響いてくる。しかしエンジンの音や、ポーポーと鳴る警笛にさまたげられて、切れぎれにしか聞こえない。

会いはせなんだかヨウ

……………沖でヨウ

……………マストのヨウ

……………丸そかヨウ

沖にちらほらヨウ

航海ランブヨウ

あれは……………ヨウ

……………丸そかヨウ

三等運転士 船長。少しおやすみになつては、いかがです。

船長 いや、この霧じゃブリッジをおりるわけにはいかんよ。

三等運転士 しかし、連日おやすみにならないんだから、非常にお疲れだと思ひますが……

船長 そりや疲れているさ。わたしのあたまの中は、この霧のようにぼうつとしているよ。

三等運転士 船長もそうですか。わたしなんか日の光を見ないもんだから、どうもあたまのぐあ

いが悪くつてしかたがありません。

船長 君、霧なんかには負けちゃだめだ。こういう航海の時は、霧とにらめっこをしているつもりでなくっちゃいけない。

三等運転士 霧とですか。

船長 うム、じつと腹に力を入れて、海ガスをにらめつけているんだ。そうすりや霧のほうがい

つか笑いだして、退散してしまうものだよ。

三等運転士　ちよつとお待ちください。船長。（急にピーと呼び子を吹く）

船長　なんだ。

三等運転士　いや、とものほうに……

船長　とも？

このあいだに階段をのぼってきたクツ音がとまる。

声　ご用ですか。

三等運転士　あ、クォーター・マスター（かじ取り）。急いで、とものほうへ行つて見てくれ。なん

だかへんなものが見えたから。

かじ取り　はい。

足ばやにブリッジをおりて行くクツ音。

船長　何が見えたのだ。

三等運転士　いや、はっきり見たのではないんですが、なんだか黒いものがデッキの上のところが  
つて行つたように思つたものですから。

船長　黒いもの？

三等運転士　え。

船長　君、めがね（望遠鏡）で見たのかい。

三等運転士　いいえ、今うしろをふり向いたら、ちらつと見えたのです。

船長 この霧の中がかい。

三等運転士 はあ。

船長 なんか見まちがえたんじゃないかね。

三等運転士 いいえ、そんなはずはないと思うんですが……

船長 そうか。まあ、こういう時は、嚴重の上にも嚴重にウオッチ（見はり）するほうが万全だ。

三等運転士 ぼくもそう思いまして。

かじ取りが階段をあがってくるクツ音。

かじ取り サード・オフィサー（三等運転士）、行ってみましたけれど、なんにも見えません。

三等運転士 とものほうもよく調べたのかい。

かじ取り はい。しかし、なんのこともなかったようです。

三等運転士 そうか。じゃ、ぼくの見まちがいかな。——ご苦労だった。

かじ取り はい。

かじ取りがハシゴをくだって行くクツ音。

まもなく船首のほうから鐘が一つカーンと響いてくる。

そしてホクスル（船首楼）に立っているルック・アウト（見はり）の声が風に飛ばされて、離ればなれに聞こえてくる。

見はり スターボード・パウ（右ゲン船首）……あかりが……まあす。

船長 オーラーイ。（大きく引っぱった声で、それに答える）

三等運転士　めがね（望遠鏡）で見てみましょう。

船長　どうだ。見えるかい。

三等運転士　はい。スターボード・バウ・ワンポイントに、ほんやりグリーン（緑燈）が見えます。

遠く、まをおいてポーッ、ポーッと警笛の音が聞こえる。

船長　うム、ホイッスル（汽笛）も聞こえる。少しあらけてやるかな。

三等運転士　そうですね。

船長　（命令口調でゆるく）スターボード・ヘルム（右かじ）。

船橋でかじを取っているかじ取り　（くり返す）スターボード・ヘルム、サー。

こちらの警笛と向こうの船の警笛とが交互に鳴る。向こうの汽笛の音がだんだん近づいてくる。

船長　（長く引っぱった声で）ステーディ。

かじ取り　（くり返す）ステーディ、サー。

かじ輪をまわす音ゴトゴトと響く。

三等運転士　カムチャッカ帰りの船でしょうか。

船長　たぶんそうだろう。

三等運転士　向こうも霧で、だいぶ悩まされているようですな。

船長　うム。

両方の汽笛の音がすれちがったと思ううちに、やがて向こうの音はしだいに遠ざかって行く。

船長 （命令的に） コース・アゲーン（針路もとへ）。

かじ取り コース・アゲーン、サー。

唱えかえすと、テレグラフ（電令器）をカラーン、カラーンと鳴らす。下からもまたカラーン、カラーンという響きがやや低くのはってくる。

しばらく断続的な汽笛の響きとエンジンの回転するかすかな音だけ。

突然、前方でドブーンという水おとが聞こえる。  
と、カンバンから、

—— あっ、だれか落ちた。

三等運転士 なに？

—— 左ゲンに人が落ちました。

船長 早くライフ・ブイ（救命袋）を投げろ。

そのことばが終わるか終わらぬくらいうちにライフ・ブイが海上に投げこまれて、バシャーンという音を立てる。

—— 投げました。

船長 ようし。——（沈着に命令する）ハード・スターボード（取りかじいっぱい）。

かじ取り （ややはや口に唱えかえす）ハード・スターボード、サー。

船長 ストップ・エンジン（機関停止）。

三等運転士 ストップ・エンジン、サー。

テレグラフを鳴らす。下からも同じようにテレグラフが鳴る。まもなく、急にエンジンをとめたので、安全弁から漏れる蒸気の音がブーとすさまじい音を立てる。

船長 ヘルム・アミッドシップ（かじ正中）。

かじ取り ヘルム・アミッドシップ、サー。

船長 フルスターン（あとへ）。

三等運転士 フルスターン、サー。

船長 ストップ・エンジン。

三等運転士 ストップ・エンジン、サー。

テレグラフをカラーンカラーンと鳴らす。下からもまた響いてくる。

船長 左ゲン二番ボートおろせ。——サード・メート（三等運転士）。君、艇長になって行きたまえ。

三等運転士 はい。（急いで階段を駆けおりのクツ音）

やがてボートの綱をおろす音がキリキリと聞こえ、ボートがバシャーンと水についたと思うと、もう人

ひとのこいで行くオールの影響と掛け声が聞こえる。それがだんだん遠ざかって行く。

船長　おい、カーゴ・ランプ（荷やく燈）を左ゲンに照らせ。

下のデッキから、「アイアイ、サー。」と走りながら答える船員の声がある。  
続いてデッキに、

——  
なんだなんだ。

——  
どうして船がとまっちゃったんだ。

——  
おい、どうしたんだ。どうしたんだ。

なぞと言う人ごとともに、デッキに駆けあがってくるクツ音がはげしく聞こえる。

船長　（メガホンで）　どうだあ。見つかったかあ。

三等運転士　（やはりメガホンで、しかし声はかなりちいさくしか聞こえない）　まだ見つかりませえん。

船長　　ブイの位置はわかったのかあ。

三等運転士　　ブイはここに見えてますが、人かげはまるでありません。

船長　　よくその辺を捜せえ。

三等運転士　　承知しました。

カンパンの声　　おい、どうしたんだ。

同　　身なげだとさ！